

学校教育目標の設定とその教育課程へ具現化の事例[†]

—秋田における事例を通して—

佐藤 光咲・浦野 弘*

秋田大学教育文化学部

秋田県内の小中学校全校を対象に、2014年度の各校の「学校教育目標」を収集し、その特徴をまとめている。その結果、学習習慣や学力向上に関するものは、ほとんど学校教育目標の中には含まれておらず、自ら学ぶ力や自己学習力、あるいは社会性や協調性に関するものが上位に位置していることが明らかになった。また、「校訓」あるいは「校訓的なもの」等を掲げている中学校は62校（52%）あり、大きな改革への意識は少ないと見ることもできる。その一方で、副題に新しき風を吹き込む努力や、お題目的になりがちな学校教育目標を、教育課程全体の構築の基礎に据え、日々の学級での子どもの学びの営みに組み込んで行こうとする試みも行われている実態を明らかにしている。

キーワード：学校教育目標、教育課程、小学校、中学校、学校要覧

1. はじめに

義務教育学校の学校要覧等には、学校教育目標が示されている。それは、教育する学校が教育される側のなかに実現しようとする「そうあって欲しい人間の姿」を表現したためであり、価値である（児島、1982）と言える。この価値や理念が非常に抽象度の高いレベルであれば、学校組織の構成員の一致度は高いが、日々の教育実践のレベルになれば個々の教師の価値観により、その目標の一致度は著しく低減する。そこで、その多くは、抽象的な表現であったり、長期にわたりお飾り的なものとなっている場合がある。

しかも、学校教育目標は教育課程編成とは直接的に結びつくことが少なく、PDCAサイクルのマネジメントが強調される中でも、あえて変えなくとも不都合が生じないというのが現状である。図1に示す各目標と教育課程全体を関連付けるすべての矢印が機能せずに、学校教育目標のみが独立して動いてい

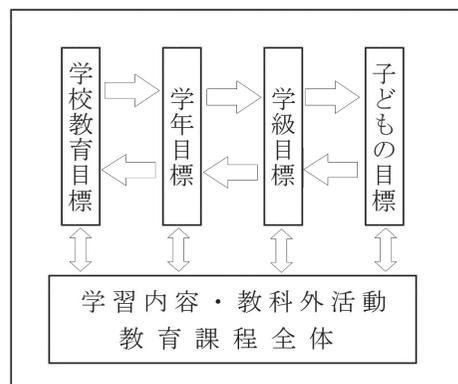


図1 学校教育目標との連携

るのが現状と言える。学校教育目標を効果的に実現していくには、教師集団の中でその意味するところを共有化し、日常の教育実践の中で意識することが重要であり、図中の矢印の日々の往還が肝要と言える。

このような視点から、高階（1990）が言う、抽象的な目標表現で示されていれば、どう変えてもあまり変わり映えしない。その結果、学校教育目標はお飾りになってしまい、いつの間にか何年も同じ表現で居座り続け、はてはそれがどんな理由で設置され

2015年1月8日受理

[†]Research on the Construction of the Educational Objectives and the Realization on Curriculum in the School: Case studies in Akita Prefecture

*Kousaki SATO and Hiroshi URANO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

たのか、そのことすらわからなくなってしまうといようなことからの脱却が必要である。

一方、耳塚（2003）が言うような、教育改革の方向性が理念として盛り込まれたり、教育活動の特色を進めるうえでのスローガンとして、位置づける事例も見られるようになってきている。

このように、社会の変化が急速に進む中、学校は絶えずそれらにも目配りをし、継続的に改善をすること、すなわち、不易と流行を見極めることが求められるところでもある。

このように、抽象的な表現ではありながら、変化しつつある学校教育目標に関して、筆者らは、秋田県内の小中学校全校を対象に、2014年度の各校の「学校教育目標」を収集し、その特徴をまとめた。その結果について報告すると共に、その中から、学校教育目標から教育課程編成に特徴的な取り組みをしている学校を抽出し、聞き取り調査も行ったので、その事例について報告する。

2. 「学校教育目標」及び「教育課程」に関する資料等の調査の方法

秋田県内の小中学校の「学校要覧」及び「各校のホームページ」等に掲載されている「学校教育目標」を、2014年5月～7月にかけて収集し、その一覧を作成した。この一覧には、標語的な表現になっているものを集計し、経営方針等にある記述は今回の集計には含まれていない。上滝ら（1978）と同様に、そこにあるキーワードにのみ着目し、文脈からの解釈はせずに、それらの集約・整理を行った。

また、学校要覧及び一部聞き取りした内容等から、教育課程編成のプロセスにおいて、学校教育目標との関わりが明示されていると思われる学校に対しては、学校便覧等の教育課程が掲載されている資料や冊子等の提供を求め、さらに聞き取りを行った。

3. 「学校教育目標」に関する調査の結果

3.1 教育目標にある対象の違い

「ふるさとを愛し、自ら学び、豊かに表現しようとする生徒の育成」というように「教師（学校）が～する」という目標と、「かしこくやさしくたくましく」というように「子どもが～する」という子どもの行動的な表現のものに大別できた。また、その両者を並列的に表記してあるものもあった。その結果を表1に示す。

表1 目標の主体別の割合

校種	主体教師	主体子ども	両者・併記
小学校	91 (41%)	108 (49%)	23 (10%)
中学校	91 (76%)	25 (21%)	4 (3%)

学校教育目標の設定においては、法令・規則等の法制上の学校教育の目標がある他に、都道府県教育委員会の教育目標、あるいは市町村教育委員会の教育目標等にも考慮する必要がある。また、地域や子どもの実態も当然である。

このような中、表1に示すように、小学校に比べ、中学校の方が「育成」という教師主体の表現が多く見られた。これは、まさに教育観の違い、広い意味での子どもの「学び」に対するスタンスの違いから生じるものと思われる。

一方、この調査では、地域による表現の相違や傾向の著しい特徴は明らかにならなかった。しかし、A市では小中学校ともすべての学校の学校教育目標の中に、「育成」という表現が使われていた（育成すべき像については各校とも異なっていた）が、県内の他の地域では、それらは混在していた。

3.2 教育目標に使用されているキーワード

学校教育目標に含まれているキーワードを、集計した。その内、出現頻度の多かったキーワードの内、小中学校とも上位6番までを表2にまとめた。

小学校、中学校共に、5つ（「たくましい」「心（豊かな心、心豊かな）」「学（学ぶ、学習）」「生きる（生きる力、生き方）」）が共通であり、異なる「夢（夢、夢に向かって）」と「志」も同じような概念を表現したワードと捉えることができる。これらは現代社会から求められる資質でもあり、社会からの要請を受け止め、あるいは意識し、学校教育目標が策定されていると言えよう。

全国の小中学校1,019校を対象に、1972～74年の学校要覧を手がかりに学校教育目標を集約した調査結果（上滝ら、1978）では、明確な傾向として「健康、自主性、がんばり、よく考える（思考力）、豊かな情操、創造性、たくましさ、実践力」などが上位に入っており、「多義的なことば、多様な解釈を可能にする抽象的なことばが多く含まれている」と指摘している。また、この結果を徳村（1992）は、「いずれかといえば、個人的資質にかかわりを持つものが上

表2 学校教育目標に多くみられるキーワード

数値は件数, () は割合 小学校N=222, 中学校N=120

	キーワード	該当数
小学校	たくましい	102 (46%)
	心(豊かな心, 心豊かな)	99 (45%)
	夢(夢, 夢に向かって)	82 (37%)
	学(学ぶ, 学習)	62 (28%)
	かしこい, かしこく	50 (23%)
	生きる(生きる力, 生き方)	40 (18%)
中学校	心(豊かな心, 心豊かな)	59 (49%)
	たくましい	51 (43%)
	自ら(自主, 自律, 自立)	42 (35%)
	学(学ぶ, 学習)	41 (34%)
	生きる(生きる力, 生き方)	38 (32%)
	志	20 (17%)

位に集中しており, これに対して, たとえば, 協力, 勤労, 仲よくする, 規律, 礼儀, 助けあい, 自他の尊重というような, いわば, 社会的=人間関係の資質に関するものは相対的に頻度が低い」と解説している。

また, 学校教育目標に含まれている言葉(類似した言葉も含む)を, 選択肢から複数回答するという耳塚(2003)や橋本(2011)の調査結果では, 2002年と2010年のいずれの調査でも小中学校ともに, 「心の教育 豊かな心」「思いやり」「健康体力」が上位3位までに入っている。

ところが, 本調査では, 「思いやり」は小学校で2校(1%), 中学校で6校(5%), 「健康」は小学校で3校(1%), 中学校で2校(2%)と少なく, 「協力・協調」は中学校では12校(10%)とややあるが, 小学校では2校(1%)と少ない。

このように, 全国的な調査と比較すると, 秋田は「他者意識」, 「他者への思いやり」というより, むしろ, 「自己実現」あるいは「自己の生き方」というような「子ども自身の生き方」という視点から設定された学校教育目標が多い傾向にあると言える。一方, 「健康体力」や「学力向上」というものは少ない結果となっている。

3.3 特徴的な記述のあった事例

(1) 「明るく かしこく たくましく ~自分らしく輝く子どもの育成~」 B小学校の事例

子どもの言葉で目標とする具体的なイメージを示し, 一方でそれを支える教師の指導支援に一人一人の個の重視を端的に織り込んでいる。

その具体的な学校経営案には, 目指す子ども像として,

- ①ふるさとを誇りに思い, 自信を持って生きる明るい子ども
- ②自分と仲間を大切にし, 共によりよく生きようとするかしこい子ども
- ③未来を見すえ, 夢や希望を持って努力するたくましい子ども

と, その観点を上げると共に, その実現のための「学校経営の基本方針」に,

- ・思いやりをもって協力しあえる, 心豊かな人間性
- ・思いや考えを伝え合い, お互いを切磋琢磨する人間関係
- ・将来への夢をもち自分の道を切り開いていくたくましい精神力

をかけた, 具体的には,

- ・未来に向かって, 夢や希望を持たせられるような活動の創造
- ・自己を認識し, お互いを認め会える人間関係の構築
- ・個々が認められるような, 一人一人が活躍できる場の設定

を工夫する授業等を目指すということを端的に示している。

(2) 「共に生き, 共に学び, 一人一人が響き合う学校~四つの鐘を, 高らかに響かせよう」 C小学校の事例

ここに示されている四つの鐘については,

- ①よく学ぶ子ども「学習の鐘」
 - ・進んで学び, わかるまで取り組む子ども
 - ・よく聴き, よく考え, 自分のことばで表現する子ども
 - ・読書や様々な学びを通して, 新たな世界を広げる子ども
- ②やさしい子ども「友情の鐘」
 - ・明るく元気なあいさつや返事をする子ども
 - ・思いやりの心を持ち, 誰とでも仲良くする子ども

も

- ・自然や美しいものに感動できる子ども
- ③進んで活動する子ども「勤労の鐘」
- ・みんなのために、できることを進んで取り組む子ども
- ・めあてに向かって、最後まで努力する子ども
- ・みんなのものや自分のものを大切に使う子ども
- ④よく遊ぶ子ども「健康の鐘」
- ・進んで運動し、健康な体の子ども
- ・身体の清潔や健康に気を配る子ども
- ・命の大切さがわかり、正しい行動を取れる子ども

というように、子どもの理解可能な具体的な行動目標として学校経営案や保護者向けの資料に示されており、教師の学級経営上の目標になるものとなっている。

(3) 学校教育目標が継続している D中学校の事例

同じ学校教育目標が意図的に15年間継続している事例である。

D中学校では、1999年に赴任した19代校長が翌年に「志に生きる」を掲げて以来、2014年現在の25代校長までの15年間、同一の学校教育目標が意図的に継続している。聞き取り調査からは、長期にわたり継続されてきた背景として次のようなことがあげられる。

「志に生きる」とは、「世のため、人のために尽くす」という、人としての在り方、生き方につながるいわば普遍的な価値を持つ一方、多様な解釈のなりたつ言葉である。そこには、目標を持つだけでなく、生き方として実践することを謳っているとも言える。さらに、長きにわたり同窓生等に誇りをもって歌い継がれてきた同校の校歌の詩に「われらまた高き義務もて」に通じるものがある。

「志に生きる」を示した際に「～副題～」というスタイルを採ったことが、以後の歴代の校長がこの教育目標の変更ではなく、副題に願いを書き込み、「志に生きる」をいわば校是と見なしながら、時代の状況や学校の実態に即して副題をもって学校経営にメリハリを付けてきたという状況が明らかになった。その副題を、具体的に以下に示す。

- ・2000年度：未来を切り開く、心豊かで意欲ある生徒を育てる－やる気、思いやり、たくましさ
- ・2001～02年度：夢チャレンジ、挑戦、結集、向上

- ・2003～04年度：個性豊かにたくましく
- ・2005～06年度：日々新たな自分磨きの旅
- ・2007～09年度：いまを大切にいまを全力で
- ・2010年度：燃えよ、伸びよ、眉高く
- ・2011～13年度：燃えよD中 伸びよ D中！
- ・2014年度～：夢と誇りを持って前向きに

(4) その他の中学校の事例

以下、2つの中学校での事例のみを記す。

「あの丘を越えよ～志をもち 啓発し合い 未来を拓く～（三精神：自発・創意・責任）」E中学校や、「学び合い支え合い高め合い」F中学校のように、秋田の教育の特徴である底辺層の底上げに結びつく「合い」という言葉も多く見られる。

4. 「学校教育目標」を「教育課程」に反映させる事例

4.1 学校教育目標を学校のすべての活動の基礎に置いている事例

G中学校では、学校教育目標として、「△の友よ三信条の誇りを胸に自ら信じる道を歩め」（△：校名一部が使われている）を掲げて、2年目である。ここにある「三信条」というのは、同校の生徒会が1964年に制定し、翌年その碑の除幕式を行い、現在も校門を入ったところにその碑がある。そこには、「友愛を深め ルールを守り ファイトを燃やそう」と記されている。

現在の校長は、赴任に際し、同校の創立60周年を迎えたことを踏まえ、新たな歴史を刻むために上記の「△の友よ三信条の誇りを胸に自ら信じる道を歩め」を設定したと述べている。現在でも、諸行事の際には、生徒三信条の誇りを胸に、自分たちのよさに自信をもって、未来に向かって大きくはばたくことを示し、あるいは、学校だより等に、『△中教職員は、子どもたち、保護者の皆様、そして、地域の皆様との信頼の絆を△中教育の基盤として、自分の可能性に限りなく挑戦する生徒を育てたいと思います。また、「礼儀・礼節を重んじる指導」に力を入れ、「社会に通用する力（礼儀・責任）」や「目標に向かってひたむきになんげん力」「よりよい人間関係を築く力」などを育ててまいります。どうぞよろしくお願いたします。』というように保護者へも強いメッセージを発信している学校である。

図2に示すように、学校経営の指針の巻頭にこれがかかれており、続いて、右側には、〈目指す生徒像〉



図7 G中学校の食に関する指導の全体計画

4.2 学校教育目標の子どもへの具現化の事例

教室での掲示物の一つに、今学期の目標的なものがある。その一例を、写真1に示す。この各項目は、学校教育目標との整合性はなく、担任や学年等で独自に設定している場合が多い。

この点に関しての取り組みとして、H小学校の事例がある。同校の学校教育目標は、「自律（のびのびわくわくきびきび）」である。この目標について、各教室では、表現方法は多少異なるが、写真2に示すように、学校教育目標の具体である3つの事柄に関して、一人一人の学期ごとの自己目標を具体的に記し、またその達成度（努力度）を月別に3段階程度で自己表したものが記録できるようにしてある。これが、教室後方に全員分が掲示してある。

同様な事例は、筆者の一人が他県を2012年に調査した際に、I中学校にもあった。校門のゲートには、「学校は、勉強する所です。」とあり、さらに、「学校は、頭をきたえる所です。学校は、心をみがく所です。学校は、体をきたえる所です。」と知・徳・体の目標が掲示されている。この学校教育目標に即した形

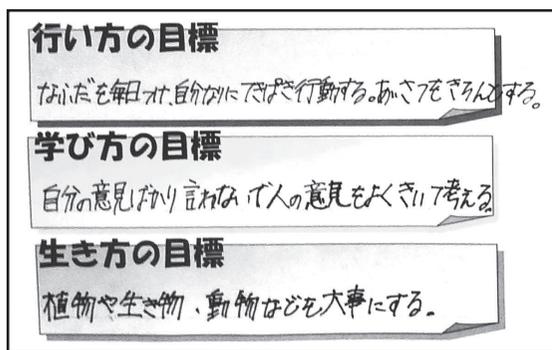


写真1 多く学校での学期の個人目標の例

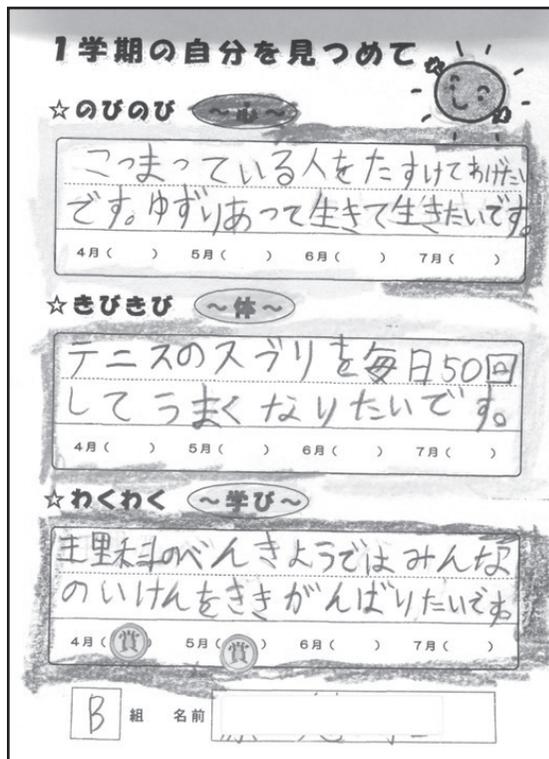


写真2 H小学校での学期の個人目標の例

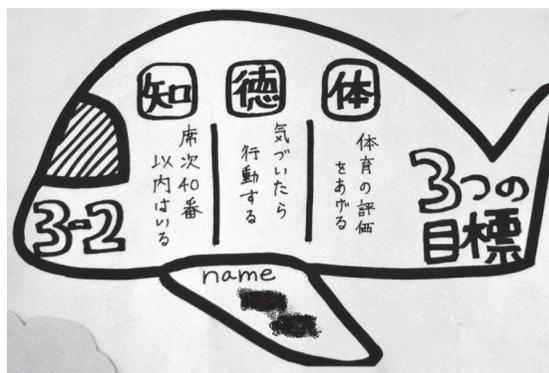


写真3 I中学校での学期の個人目標の例

で、教室の後方の壁には、写真3のようにクラスの一人一人の学校教育目標に即した学期の目標が掲示されていた。さらに、この3つの目標は、学級経営や学年経営でも担当教員に同様な観点から、目標の設定と学期毎の評価が課せられていた。

また、筆者の一人が他県のJ小学校で調査した事例では、同校の学校教育目標は、「いのちを大切にし、

世の中のためにつくす人になろう」というものであるが、抽象的ではあるが、「算数の問題にも『いのち』があり、大切にするとすることは、問題に対する誠意ある対応、すなわち、問題を解くとか解決するということが、問題のいのちと対峙し、あるいは問題の機能が全うすることであり、そこから学ばせてもらったと捉えることが大事である。」というように、集会時や日々の教育課程の中での実践において、その実現に努力している事例などもある。

5. まとめにかえて

橋本(2011)は、10年前の耳塚(2003)の調査と比較して、全国的には「学習習慣」や「学力向上学力定着」の回答が10%以上増加していることを指摘しているが、本調査の秋田県ではいずれも、ほとんど学校教育目標の中には含まれていない。同様に、全国的には、「自ら学ぶ力 自己学習力」が14.9%、「社会性 協調性」が9.5%、「生きる力」が7.2%と減少したことを指摘しているが、秋田県においては、これらはいまだに上位に位置するものである。

これは、橋本(2011)が述べているように、政策上、引き続き重視されている項目である「学力」や「学習習慣」を明確に掲げる学校が全国的に増えたことや、中学校では学校教育目標が精選されていることが原因であるとするならば、秋田県における「学力観」あるいは「学力の危機感」は全国のものと同様であり、また、「健康」や「体力」という記述も少なく、「自己実現」あるいは「自己の生き方」というような「子ども自身の生き方」という視点から設定されたものが多い傾向にある。同様に、D中学校のような「校訓」あるいは「校訓的なもの」等掲げている中学校は、秋田県では62校(52%)あり、大きな改革への意識は少ないものと見ることもできる。

一方、それらは「温故知新」「不易と流行」という視点から見ると、D中学校の副題は「校訓」のもとに新しき風を吹き込む努力と共に、その中に「不易」を見いだそうとするスタンスをとることができる。

さらに、とかく、お題目的になりがちな学校教育目標を、教育課程全体の構築の基礎に据え、日々の学級での子どもの学びの営みに組み込んで行こうとする試みも行われている実態を明らかにすることができた。

謝辞：本研究を進めるにあたりご協力いただいた秋田県内をはじめとする各学校の教職員の方々に感謝いたします。

付記：本研究の一部は、科学研究費助成事業・基盤研究(B)(研究代表：浦野弘)の支援を受けている。

参考文献

- 橋本尚美(2011)学校教育目標. 第5回学習指導基本調査報告書-小学校・中学校版-. pp.40-45
 上滝孝治郎・山村賢明・藤枝静正(1978)日本の学校教育目標. ぎょうせい
 児島邦宏(1982)学校経営論. 第一法規
 耳塚寛明(2003)学校教育目標. 第3回学習指導基本調査報告書-小学校・中学校版-. pp.29-41
 高階玲治(1990)学校の教育目標は有効か. 学校経営, p.60
 徳村丞(1992)学校経営の研究(続)(2)学校教育目標の設定(3)教育課程の編成. 佐賀大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要, 8巻, pp.1-19

Summary

Authors collected "School educational Objectives" at all the elementary schools/junior high schools in the Akita prefecture, and have brought the feature of the School educational Objectives in fiscal year 2014.

As a result, it was clarified that concerned the study habit and the improvements of the scholastic abilities are not included in the School educational Objectives, and that "Power to learn voluntarily willingness to learn independently", "Self-study Ability", "Sociality" and "Cooperation" are located in the high rank. "School principle" is written in the School educational Objectives of 62 junior high schools (52%). That can be thought that consideration to the reform is a little. However, there were some efforts to blow in a new wind to the sub-title. It is clarified that the attempt tries to place the school educational objectives into the base of the construction of the entire curriculum, and to build it into managing child's learning in the class of every day.

Key Words : School Educational Objectives,
Curriculum, Elementary School,
Junior High School, School Directory

(Received January 8, 2015)